

“次工程は仲間”を求めつづけて

松 沢 常 夫

心配の種が一つ増えた

「はい、こちら高崎警察署……あつ、ごめんなさい、うちの人かと思つて。びっくりしたでしょ。ええ、ときどき“はい、群馬県警”なんてやるの。フフフ……」

電話の向うで、一恵さんが笑っている。その前に電話したときは高校三年の実和さんがでたが、こちらの口調をまねて、「はい、お父さんもお母さんもういっしょいません」なんてふざけていた。なんとも心のなごむ一家だ。

私は、ぜひ一晩、泊っていけと誘われた。

長井一恵さん（四〇歳）は、沖電気高崎工場で働いている。職場結婚し、おしどり夫婦で通っていたが、夫の明さん（四二歳）が指名解雇されてからは、ともすれば委縮しそうになる中を、職場の仲間と、

明さんたちの支えで今日までがんばってきた。そして今、明さんは、八年ぶりの職場復帰という大きな勝利の日を迎えようとしている。

だが、一恵さんにとっては、率直に言つて、「うれしいというより、心配の種が一つふえた」という気持ちの方が強い。

「ブランクが長かったでしょ。根がまじめな人だから、仕事はどんなことでも、与えられればそれなりにやつていくと思うけど、昔、あの人が執行委員に最高点で当選したときと職場の雰囲気はまるで違う。仲間の心の変化とのくいちがいでつぶされないだろうか、そのことで体をこわさないだろうか……」

沖電気争議団の学習会に、夫婦そろって上京した長井さんからこんな話を聞かされた私は、八年間の職場と労働者の変化を、そして今日まで一恵さんを支えてきたものは何だったのかを、もっと深く知りたと思った。そこを明らかにすることが、職場に復帰する人たちもふくめて、沖電気での新しい闘いを築きあげていく上で、一つの有力な

武器になるにちがいないと考えたからだ。私は、一度、じっくり話を聞かせてほしいと、電話をかけたのだった。

楽しかったな、あのころは……

「えーっ、食べてきたの、待ってたのに——」

十月の土曜の夜、高崎市の郊外にある長井さん宅を訪ねると、鍋物とビールで歓迎してくれた。実和さんは留守だったが、中学三年の学君もいっしょにテーブルを囲む。

「この炒め物は学がつくったんです。料理とピアノが好きで、うちの『主婦』はこの子なの」と一恵さん。明さんは、味つけがどうのと、評論家をきめこんでいるようだ。

部屋を見回すと、実和さんが読書感想文コンクールでもらった数々の賞状と並んで、一枚の写真が額に入れて飾ってある。

「あれが父です」

まだ四〇代の、髪を分けた、りりしい姿だ。一恵さんは、生きる基本を父親に教えられたという。

「人間、ひとりだけの幸福って、ないんだよ。隣りの人が不幸になれば、自分も、いつ同じように不幸になるかわからない。みんなが幸福になって、初めて本当の幸福があるんだよ」というのが、父の口ぐせでした。私も、より多くの人が、より幸福になるように、そんな生き方をしたいと思っているの」

こう願う一恵さんにとって、かつての職場は、人を愛し、人の中で自分を生きることができた職場だったと言う。

一恵さんは高校を卒業し、沖電気に入社すると、製造部の計画課に

配属された。

顧客から注文をうけると、それを作るには、どういう部品を何個必要とし、どのような加工をし、どう組み立て、出荷までもっていくのかの工程を書類に打ちこむキーパンチャーの仕事だ。

しかし、「ブ」がプレスで、「プ」が部品加工であることなどはわかったが、それがどんな加工かはわからない。「穴さらい」だの「ネジタテ」だのはまるでわからない。

「わからないことを打ってたんじゃ、ミスすると思います。現場を全部案内してください」

こう言われた上司は「そんな質問、されたことがない」と言いながらも、「じゃあ」と、材料倉庫から加工の現場までパンチャー五人を案内してくれた。

プレスの現場では、係長が出てきて、こう言った。

「おめえ達、パンチャーか。一言いいたい。『ブ：マゲ』というのを『ブ：ハゲ』と打っている。俺のことを知っていて、わざと打ったな」

キーボードの「マ」と「ハ」は並んでいるのでまちがえやすいのだが、みごとなハゲの持ち主がそう言うので、皆は思わずケラケラと笑ってしまった。一恵さんも、笑いながら心の底から一体感がわきあがってくるのを感じていた。こうして、自分の仕事の意味を積極的に知ろうと努力した一恵さんの打つパンチは、ミスがほとんどなく、しかも早いので、見本市の会場で腕をふるうこともあった。

組合活動も、入社二年目に青年婦人部の幹事、つぎの年には常任幹事、そして結婚するときは明さんともども副部長をつとめた。

「あのころは、現場へもよく遊びに行ったわ。昼休みになると、工作機械の真中の通路に私を囲んで十人くらいがあつまり、始業のベルが鳴るまでワイワイガヤガヤ、笑い声がたえなかった。予鈴が鳴ると、「バイバイ、またね」って、自分の職場に帰る。楽しかったな、あのころは。みんな仕事に誇りを持ってさ。どんなグチ話も、みんなの前でなら平気で言えたとし、他人の悩みをみんな考えてたもの。どこへ行っちゃったんだろう。あのころのみんなは……」

一恵さんは、昔のことを思い浮かべながら、そっと涙ぐんだ。お酒のせいでふっと、緊張がゆるんだのかもしれない。

しかし、過去を懐かしんでいるだけでは、とてももちこたえられるような職場では、なかったはずだ。

「父の教え」は、一恵さんが嵐にたち向う中でこそ試されただろうし、一見ズタズタに切り裂かれたかのように見える職場の人間関係の中で、自分自身を支える何かを発見し、つくりあげていったからこそ今日があるのではないか。

指名解雇後の職場の変化と一恵さんのかかわり方を、私は、改めて聞いてみた。

厳しさの中で大切にしたもの、発見したもの

「父ちゃんがクビを切られて、私が職場にのこされたとき、一番思っていたのは「自分は絶対に委縮すまい」ってことなの。だって、私たち、何も悪いことしてきたわけじゃないでしょ。労働者の立場を守る運動をしてきたし、みんなの中に生きてきてほんとに良かったと思うもの。そういう私の生き方を委縮する必要はないし、一時的にいろんなこと

があったとしても、私がみんなを受け入れようとしていけば、私のことも、みんなが必ず受け入れてくれるにちがいない、そう思ったの」だから、指名解雇直後、社内の廊下ですれちがった人たちが、複雑な表情で、そっと下を向いて通りすぎようとすると、一恵さんの方から声をかけた。「おはよう！ 元気だしてね」と。相手は、びっくりに顔をあげた。

「気のどく」「守れなかった」……いろいろな思いが、下を向かせたのだろうが、一恵さんがっこり笑ってみせると、安心した顔が返ってきた。そんな日々が続いたあと、しばらくは「おはよう」を、おたがいに元気で言いあえる時期があった。

しかし、そのうち、会社から「あいつとは口をきくな、顔も見ろな、あいさつもするな」の攻撃が始まった。

それは、一恵さんに対してだけのものではなく、工場全体の機械化が推進される中での異常なまでの労務管理の強化と一体のものであった。

「朝は何時に来なさい」「始まる前にラジオ体操をしなさい」「始まったらちゃんと席にいなさい」「トイレ以外は行っちゃいけません」……。

こんな中だから、一恵さんもあまりにも情なくなつて、何かあると涙がでそうになることもあった。しかし、そんな時、必ずだれか励ましてくれる人が現われた。

「会社からいじめられたのか？ がんばれよな」と言ってくれる人。

「あんたが委縮すると、みんなもそうなる。あんたは堂々としていてくれ。人間って、ゴムまりみたいで、攻撃にあうと縮む。だけど、攻

弊がゆるむとまたふくらむ。いまは、がまんだ」と肩をたたいてくれる人。廊下を走っていると、思いもかけない人が「なに転がってるんだい」と、わざとみんなの前で声をかけてくれた。丸まっこくて、「コロちゃん」というあだ名の一恵さんが「これでも走ってるんだよ」とやりかえすと、まわりの人も「ワッ」とつられて笑った。

一恵さんは、自分がかんばることによって、表面には出られないが、人間としての誇りを失わずに歯を喰いしばって生きている人たちを発見しつづけることができたのだ。

そしてまた、自分のような人間がたった一人でも職場にいることが、どんなに職場の仲間たちの励みになっているかも知らされた。

たとえば、始業前のラジオ体操。全員参加でやっている職場が多く、遅れた人はどこかの隅に隠れているような、そんな雰囲気の中で、一恵さんの職場は、かなり自由にやれている。

「体操はいいことだけど、まだ始業時間前でしょ」と言いきる一恵さんの存在がそうさせていることはまちがいない。

一恵さんは、強制されているみんなの気持ちも考えて、三〇分前までは会社に来ている。そして、体操にでるときもあるし、仕事にかかっていることも、私用の手紙を書いている場合もある。

QC運動でもそうだ。他の職場が昼休みにかけてやっているのに、一恵さんは「もうお昼休みだからやめましょうよ」ときちんと言うし、重要な議論だと思うときには「昼休みにくいこんでもやりましょう」と、率先してとりくむ。

あくまでもみんなといっしょに、生きいきと、のびのびと働きたいという思いから、言うべきことを言い、やるべきことをやる。

こんな一恵さんは、後輩からよくトイレで話しかけられる。

「私もつらいけど、長井さんの方がよっぽどつらいのよね。長井さんががまんしてるんだから、私のがまんできないはずないよね」と。

「そうだよ、私のがまんにくらべりゃあんたのがまんなんか、たいしたことないんだから。いざとなれば私がついてるんだから、がんばりなさいよ」と言うと、「うん」と言って、もどつていく。

結婚などで会社をやめていく人がいると、女性ばかりでうどんを食べに行ったりもした。

「ある娘がね、『お世話になりました』って、あいさつしてまわって、私のところに来たとたんに、ひざの上につぶして、オーイオーイ泣くの。頭をなでながら、『幸せになるんだよ、あんたはいい性格をもってるんだから、自分の気持ちを大事にして生きるんだよ』って話したんだけど、人間って、一人ひとり、いとおいしいものですよ」

一恵さんは、娘の実和さんに「クラス中の男の子をいっぱい好きにならなさい。みんなを好きになって、ああいうところが好き、こういうところが好きって、いっぱい思いなさい。魅力的な部分は、たぶん人間の素晴らしいところだから、そこを大事にしていくことが自分を豊かにしてくれるんだよ」と話したことがあるが、これは自分自身に言いかせてきたことでもある。

だから、だれをも突き放さず、だれとでも分けへだてなくつきあい、引越しの手伝いから、若い男性のズボンが裂けたときのつくろいまでめんどろをみる。こんな一恵さんは、職場の仲間にとって、何でも相談のつてもらえて、しらないうちに元気をとりもどさせてくれる「姉御」のような存在なのかもしれない。

昼休み、廊下の手洗い場で歯みがきをしていた一恵さんに、「自分は会社人間で、○点オヤジだった」という中年労働者が、しみじみ話しかけてきたこともあった。「おれは女房、子供を置き去りにして、会社をしょってたつてるつもりだった。入院しても会社に出ようとした。ところが会社は何も言ってこない。一週間たつて、「おれは何をしていたんだらう」と思うようになった。毎日来てくれる女房をみて、「家庭つて何だらう」と思った。三カ月したら、おれは会社から卒業していたよ。いまは、満点とはいかなくても女房や子供から点数をもらえるオヤジとして生きたいと思つてる」と。

一恵さんは明さんから聞いた話を思い出した。「長く入院していた人のところへ初めて見舞いにきた会社が持ってきたのは退職金だった。おれはあれから、労働者つて何だ、資本家つて何だ、と考え始めたんだ」。結婚前、残業残業で体をこわし、入院したときのことである。

みんなが、人間らしく生きられる職場、社会を、心の奥底で、痛切に願っている。自分自身ががんばり、仲間の中にとびこんで闘つてこそ、こういう人間らしく生きたいという労働者の熱い思いを少しづつ、少しづつでも声にし、束ねていくことができる……。一恵さんは、そう自分を励まして、今日まできたのだった。

次工程は仲間なんだ

指名解雇後の沖電気では、労務管理の強化とともに、全面的な機械化が促進された。とくに高崎工場は、そのテンポが早かった。

一恵さんが入社した当時、もっとも多くの労働者をかかえ、工場スペースのほとんどをしめ、一課から四課まであった工作課は、現在

ではただ一つとなっている。

一人で何台ものNC（ニューメリック・コントロール数値制御）機器を操作するので、広いフロアに何台もの機械と数人の労働者がいるだけ。交替制がとられ、夜中でも部品がつくられる。APL（オートマティック・プロセシング・ラインII自動処理工程）工場では、部品を挿入すると、製品が梱包され、ベルトコンベアで天井を流れ、発送用のトラック便が待つサンバンに到着する。

工場の廊下の真中には、部品を運ぶ無人車が往来する。

EDP（エレクトロニクス・データ・プロセシング）といつて、工場内の間接作業、たとえば経理、在庫管理などはすべてコンピュータでやるしくみが徹底し、かつて、部品をとりそろえるために二カ月に一足という割合で靴を減らして現場を歩きまわっていた労働者が、端末のパソコンに向かってキーをたたく。

動きまわる文書は、ほとんどがワープロやパソコンの文字で、だれが打ったかわからないし、そのうち、だれでもいい気がしてくる。「あつ、これあの人の字だね、見て見て」「こんな楽しい会話もなくなった。つきつぎに変化し、機械が相手となり、機械に使われるようになっていく仕事の中で、ともすれば人間と人間の心のつながりが見えなくなってくる。

そんな中で、「あのころの楽しかった思い」をとりもどし、労働者の連帯を回復し発展させられる職場に変えていくにはどうしたらいいのか。一恵さんは、その一つのカギを、次の工程にたずさわる労働者を思いやることによって見いだそうとしている。

沖電気の標語の一つに、「次工程はお客様」というのがある。その

心がけで、部署部署でいいいな仕事をするように、という指示だが、一恵さんはこれを「ちょっとちがう」と言う。

「お客のことを気にかける、というのは、時にはとりつくろって、という意味もあるでしょ。次工程は、やっぱり仲間なのよ。私のあとに仲間の労働者がやるんだから、その仲間がやりやすいように、いい仕事ができるようにしてあげる。それが、いい製品を作ることだと思ふの。」次工程は仲間、だし、最後の味つけは、料理と同じで、愛情だと思うの」

ところが、全工場が機械化されて以降、ほとんどの部屋が、そこで働く労働者以外は「立入禁止」とされ、秘密主義、管理主義、そして差別がまかりとおっている。一恵さんは、このような現状を変えることなしには、よい製品が生まれるわけがないと思う。だから、労働者のあつまる場があれば、どんなところでも「元氣ーッ」と言って入りこんでいくようにしている。

一恵さんは、もう一つのカギは、技術革新を恐れず、もっと機械を使いこなせるようになっていくことだと考えている。

いま一恵さんは、受注から出荷、経理の情報まで一手に引き受けているコンピュータセンターで働いているが、ここに五〇歳を過ぎた人たち数人がオペレーターとして回されてきた。このときのあいさつは、全員が一様に「何もわからないので、よろしくお願いします」だった。昔なら現場で後輩を指導して、係長くらいにはなって、みんなに惜しまれながら定年になるだろう人たちが、不安そうな表情で言うのを聞いて、一恵さんは胸がいっぱいになった。

「大丈夫よ、現場で製品を作ってきたじゃない。伝票のことはだれ

よりもくわしいはずじゃない。計算機なんて、いままでしてきたことを効率よくやらせているだけだし、人間が教えた以上のことはしやしないんだから。計算機はどこまでの仕事で、自分たちは何をどうするのか、どうやればどうなるのか、理屈を覚えちゃえば平気よ。覚えなくちゃいけないことなんて少しだから、すぐ慣れるわよ」

こう励まされた先輩たちは、「そうか」と少し安心した様子だったが、なんとかできるようになってからも、わからないところがでてくると、一恵さんに電話をかけてきて、「すまねえなあ、そうやって、ていねいに教えてくれるのはあんだだけだよ」と言う。

熟練が奪われるということは、それにとまっていた人間関係が奪われるということでもある。「すまねえなあ」のひびきにこもる、その哀しさの深さを思わずにはいられない。

しかし、その年輩の労働者たちが「やるっきゃねえ」と言って、マニュアルを見ながら必死に勉強したとき、一カ月もたたないうちに一人前のオペレーターになっていった。一恵さんは、その働く仲間たちの意欲が好きた。

「技術革新が進めば進むほど、ちょうどテレビをスイッチ一つ押すだけで見ることができるようになる、ますますだれでも使いこなせるようになるはずでしょ。だから、教育さえちゃんと受けられれば、ちっとも恐がることなんかない。それで、自分の思いどおりに使えるようになってくれば、いろんなことができるし、楽しいところがでてくるのね。人間って、新しいものにとりくむとき、ちょっと抵抗があるけど、覚えはじめると、それが喜びに変わるでしょ。わたし、自動車教習所で初めて車を動かしたとき、『動いたー』って大声をだしちゃって、

教官に“あたりまえだんべーな”ってバカにされたけど、コンピュータつかって、初めて表が描けたとき、同じようにうれしかった”

“してやったり”と、ニタニタする、あのイタヅラ小僧のような顔で、一恵さんは笑った。

資本主義社会にあって、技術は当然、両刃の剣であるが、技術革新自体は、人間の可能性を広げてくれる、とっても楽しくすばらしいものだと思える一恵さんは、自分の部署の作業工程をさらに機械化するのに役立つソフトを二つ買ってほしいという要求まで上司にだしている。受け身でなく、自分から挑戦し、提案する姿勢に変わっていくことは、人間が人間らしく生きていくことの重要な基礎だというのだ。

ただ、いまのような、労働者をいじめ、分断し、支配するやり方、まともな教育も保障しないやり方のもとでは、労働者の自発性、能力が本当にひきだされ、高められることがないことは明らかだし、その矛盾はみんなが感じている。

こういう職場に、夫が、争議団の仲間が、もどってくるのだ。

みんなの期待の中に

一恵さんは今日も、片道二〇分かかる会社と家の間を、明さんの運転する車で送り迎えしてもらっている。

「職場でくやしい思いをしたときなんか、表門で車に乗って待っていてくれる亭主に、『ただいま』って言って、その日あったことをずーっとしゃべるの。フンフン聞いてくれるだけなんだけど、気持ちがすっきりしちゃう。毎日のことだから大変だと思う。前の晩、おそかった日なんか、まだ眠っているあの人の顔をみると、起こさずにこの

まま行っちゃおうかなと思って、エンジンかけたりすると、ドドッと階段を下りてきて、寝ぼけたまま送ってくれる。会社では守衛さんも『俺にはできねえよな』と感心している。たまに迎えに来ないときもあったけど、それも、バチンコしててだから、アタマにきちゃって。でもほんとに感謝しています。あの人が職場にもどったら、またいっしょにみんなの中に入っていきます。みんながづらいとき、くやしいとき、力になれるように。そしてまた、みんなといっしょに思いきり声がだせる職場をつくるために”

“心配の種”だったはずの明さんのことだが、やっぱり“勇気のモト”のようだ。

「私って、何か困難にぶつかったり、やらなくちゃならないことがいっぱいあってどうしたらいいかわからないようなとき、とにかく出来るところから始めて、一つひとつやりながら考えるの。小さいところから農家の仕事を手伝ってたんだけど、草むしりでも、考えてるだけじゃ、一本もなくならない。とにかく前に向かって、一つひとつやりながら、根の張った太い草を先にむしるとか、いろいろ考える。そのうちに、土が見えて、先が見えてくるの”

新しい試練が待ちうけているだろう沖の職場。だが一恵さんも明さんも、おそらく自分たちが思っている以上の、職場の仲間の注目と期待の中に入っていくことを感じている。

八年間の争議と、職場の中でのふんばりは、見渡す限りの雑草の中に、「土が見え、先が見えて」くる状況をつくりだしてきている。いよいよこれからだ。